日本の白鳥　Nihon no Hakucho (Swans in Japan)　(28):30-35, 2004

千葉県本埜村のコハクチョウを観察に行きました

神谷要
(財) 中海水鳥国際交流基金財団，683-0855　米子市彦名新田665

東京周辺に白鳥の飛来地はあるのか?

鳥取県に住んでいても、時々こんな電話がかかってくる。「東京に住んでいるんだけど一番近いハクチョウの飛来地はどこですか?」。こんな質問にはいつも困ってしまう。谷津干潟や行徳の自然保護区には記録はあるものの、数年に1羽やってくるかこないかといった状態で、誰でも行けばすぐに見られるというわけではない。かといって、福島県や新潟県の飛来地を紹介しても遠いといわれてしまう。

そんな中、10年ほど前から千葉県印旛郡本埜(もとの)村にハクチョウが来ているという話を、偶然にも千葉の河辺久男先生からお聞きした。

それ以来、どんな様子か見てみたいと思いつつ、なかなか行く機会がえられなかった。今回ちょうど2003年度の日本白鳥の会の研修会が霞ヶ浦で開催されるということで、同じ関東地方なら近くにあるのだろうと、早めの飛行機にのって本埜村まで脚を伸ばしてみた。

羽田空港からのアクセスは簡単だった!!

といっても、計画があったわけではなく、とりあえず羽田空港のインフォメーションで聞けばいいと、安易に考えて飛行にのった。早速、羽田のインフォメーションで「千葉の本埜というところにハクチョウがいるらしいのですが、どうやって行ったらいいですか?」とたずねてみた。すると、お姉さんの顔が曇りはじめ、パソコンをたたいたり、いろんなところに電話をかけたり、まったくわからないので困ってしまったといった様子になってしまった。ついには、上司らしき人が出できて、地図を開いての作戦会議になってしまう。

「野生のハクチョウ? 新潟ですか?」「そんな生き物この辺にいないよ。」「物好きですね。」

傷つく言葉に耐えながらやっと、「印旛日本医大」という駅の近くということがわかった。「それなら、地下二階に降りて京成電鉄の「印旛日本医大」行きに乗り、終点まで行けばいいですよ」との返事。困った客に解放されて、お姉さんの顔もやっと晴れた。

東京市内での何度もの乗換えを覚悟していた私も、ずいぶん簡単な交通手段でい

Kname KAMIYA. Report of swan watching travel in Motono Village, Chiba Prefecture, Japan.

けることに喜んだ。今まで東京で何度乗り間違いをしたことか・・・

電車一本なら余裕と、意気揚々と電車に乗り込み、気分はいい日旅立ちである。周りは忙しそうなサラリーマンばかりで、まさかハクチョウを見に電車に乗っている奴がいるなんて誰もいないだろうなと、何かわくわくした気分であつた。電車は、発車するとすいすいと東京の街を進み、都心では地下鉄、そこを抜けると下町の高架を走っていった。

しかし、1時間もするとその景色も飽きてくる。「遠い・・・飛行機に乗っていた時間より長いじゃないか?」と思ったころにやっと周辺の風景が、緑に換わり始めた。しかしそれでも、まだ終点まで至らない。合計2時間ちかくかけてやっと「印旛日本医大駅」にたどりついた。

誰もいない駅?

ところが、駅に降りてびっくりした。とてもキレイで立派な駅などだか、誰もいない・・タクシーもバスもない。何か駅に説明でもあるかと思えば、何もない・・・。

ここまで来てハクチョウを見られないで帰るのかもと思っていると、広い構内の片隅に公衆電話に本埜タクシーの張り紙を見つけた。ここが本埜村に近いことは間

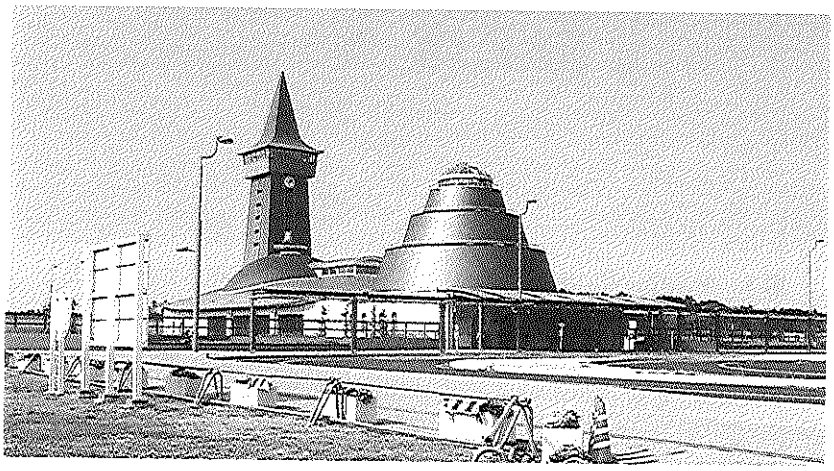

図1．印旛日本医大前駅．近代的できれいな駅だが、タクシーもいない．

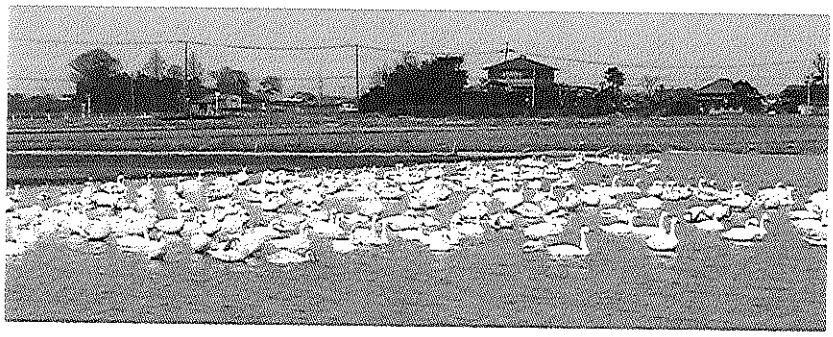

図2．水を張った水田に集まっているコハクチョウたち．冬の間、一日中この田んぼで過ごす．

違いないらしい。

タクシー会社に電話をして、恐る恐る「ハクチョウを見に行きたいのですが」とたずねると、「わかりました。ちょっとそこで待っていてください」との返事。よかった。もし、わからないといわれたら、本当にたどり着く方法がなかったのだ。

タクシーに乗り込むと、周囲はあっという間に田園風景に換わった。いわゆる日本の田園風景で私の住む鳥取と変わらないようだが、広がる田んぼの様子がちょっと違う。なんというか景色が黄褐色なのだ。私の住んでいる鳥取県では、冬の水田は緑である。灌漑施設がそれほど近代化していないので、冬に水を完全に落とせないのだ。そのため、冬の刈田に雑草がマット状に広がり緑なのだ。ハクチョウは、この雑草を餌にしている。ところがこちらの刈田は、水が良く落ちており、丁寧に耕起してある。こうした水田は、風が吹くと埃が舞い上がりまるで荒野の砂漠のよ

図３．何もない広い水田の真ん中に多くの人が見学にやってきている．

図４．ハクチョウの餌を準備するボランティア．米だけではなく、白菜などの野菜も与える．

うである。これが、生き物が住めないという噂の「乾田」というものかと実感とした。確かに、このような刈田ではハクチョウの餌である雑草も落ちモミもなく、メダカもドジョウも冬を越せないであろう。ここのハクチョウはどのように生活しているのかと心配になった。

ハクチョウ飛来地は砂漠のオアシス

そんな砂漠のような水田を進んでいくと、なにやら田んぼの真ん中に車がたくさん並んだ場所が見えた。「あそこだよ」とタクシーの運転手。平日だというのに100人以上の人だかりができており、お店まで出ていた。子どもが走りまわり若者からお年寄りまでにこやかに歩く様子は、まるで縁日の会場のようである。

その真ん中には、3枚ほどの水田に水が張られていた。その中には400羽ほどのコハクチョウがぎっしり降りており、その周りの広大な黄褐色の田んぼには見向きもしない。これが冬期湛水水田(神谷 2002)の効果のようだ。

ハクチョウたちは、他の飛来地でよく見るように眠り、泳ぎ、鳴き交わしていた。その様子を、人々が楽しそうに見ている。この印象を一言で言えば、「砂漠の中の四角いオアシス」。そこに人や動物が集まり、いつの間にか市場ができ…といった雰囲気だ。

実際、ここはコハクチョウたちにとってオアシスのようだ。掲示されている看板によると、平成4年にこのあたりの農地改良(乾田化)をした際に、工事の関係で水を張っていたこの田んぼにコハクチョウが舞い降りたのだ。そこで、何とかハクチョウをいつかせてやろうと餌をやったのが始まりとのこと。その年にハクチョウたちが無事に帰ると、次の年もハクチョウがまたやってこられるようにと水を張った。その後、いつの間にか多くの人が協力するようになり、協力して餌を与え、いつのまにか月日が流れてこのような場所になったそうだ。

図5．ハクチョウの渡りルートを説明する看板．思わず記念写真．

白鳥の飛来地本埜の変遷

最初は、6羽ほどだった飛来数も年々増加し、今では、1000羽も超えるほどの群れになっている。最近は、大きくなったコハクチョウの群れが自然に餌をとるようにと、給餌の回数を一時的に減らしてみたり、生息地を増やそうというさまざまな試みをしているようである。しかしながら、関東の冬の苅田にはまったく餌がないらしく、一度は他の苅田に下りてもすぐに戻ってきてしまうそうである。

また、多くの観察者のために解説の看板なども立ってあり、これを読めばちょっとしたハクチョウ博士になれそうだ。米子水鳥公園が10年前に行った日本海を渡るハクチョウのわたりルート調査(Kamiay and Ozaki 2002)の結果も示してあり、思わず記念写真を撮ってしまった。

現在、本埜村は、関東地方の数少ないハクチョウの飛来地ということで、多くの人が集まるようになっている。その数は、一シーズンに15万人で、夏は普通の田んぼとなる場所であることを考えるとちょっと過密である。駐車場問題やごみ問題など別の問題も引き起こされているようだ(内藤 2003)。

帰りは、親切な地元の方にJRの成田線小林駅が便利と教えていただき、そちらを利用して帰った。こちらは、駅にタクシーが常駐していて、関東の地理に詳しい方は、こちらのほうが便利なようだ。駅に行ったら、ちゃんと地図と今年のハクチョウ飛来数が掲示してありました。どうも私は遠回り周りをしていたようであった。

備考：アクセス

JR常磐線我孫子駅から成田線成田行きに乗り換え、30分で小林駅。小林駅からは、タクシーで2000円程度。

謝辞

この紀行文を書くに当たって、西田恒子氏にいろいろと資料をいただきました。また、最初に私にここのハクチョウのことを教えていただいた元本埜第二小学校の河辺久男先生には、最初に飛来情報を教えていただいてから訪問までに5年間も時間がたってしまったことをお詫びし、訪問の報告とさせていただきます。

引用文献

Kamiya, K. and Ozaki, K. 2002. Satellite tracking of Bewick's swan migration from Lake Nakaumi, Japan. Waterbirds (Special Publication 1) 25:128-131.

神谷要. 2002. 冬の田んぼに水を張ろう!?. 日本の白鳥 (26):62-63.

内藤幸一. 2003. 本埜村・白鳥物語. 北総ふるさと文庫. 千葉県印旛村.